

## [国 語]

## 混成型テキストにおける指導の在り方の一考察

- 図表に対する意識調査とその変容の分析から -

田中 行人\*

## 1 主題設定の理由

説明的文章の学習では、文章（連続型テキスト）と図表など（非連続型テキスト）が組み合わさった混成型テキストが頻繁に使用されている。これらの図表は、読者に単なる文章のイメージを与えるものにとどまらず、論証の根拠として重要な役割を果たしている。このような混成型テキストにおける図表に関する研究には、吉川（2013）の基礎的研究を始め、多くの指導法が研究されてきた。筆者も実際に実践し、それらの効用を児童の姿から感じ取ってきた。その一方で、課題も感じている。それは、児童が他の混成型テキストと出会い、読み進めていく際に、図表を詳しく見たり、図表から読み取ったことを基に文章を読み返したりするといった姿がほとんど見られないことである。このような課題は、全国的に珍しいことではなく、様々な実践研究でも触れられており、指導がない場合でも図表を生かして文章を読み進める児童の姿を期待した指導の在り方を探っていく必要がある。

このような課題を踏まえ、今後の国語科指導の在り方について、難波（2016）は「現在行われている言語教育の授業は、態度目標と技能目標だけが取り上げられることが多いかもしれません。しかし、これだけでは、『なんのためにその知識や技能を習得させるのか、習得するのか』が見えないままになってしまいます。本来、知識や技能は『なにかのため（それが実用的であろうが非実用的であろうが）』に習得されるべきものであるはずです」と述べ、学習者自身が意味や価値を見出したり、追究したりする学習活動の必要性を主張している。つまり、混成型テキストの指導において言えば、「どのように図表を読み取らせるか」ではなく、学習者が「図表に対する意味や価値を見出していくこと」や「見出した意味や価値を追究すること」を視点に、指導の在り方を探っていくことが重要である。前述した課題の原因には、学習者自身が図表に対しての意味や価値を見出せていない状況が推測できる。そこで、筆者はこれらの二つを視点にした学習活動を構想・展開することから混成型テキストの指導の在り方の可能性を探っていきたいと考えた。

まず、「学習者が図表に対する意味や価値を見出していく学習活動」を構想する上では、図表の読み方に関わる先行研究を参考にした。岸・中村・相澤（2011）の研究によると、混成型テキストを読む学習者は「図表先行型」と「本文先行型」に分かれ、それぞれの読み方が内容理解に影響を及ぼすことが示されている。特に、「図表先行型」の学習者は、図表を先に確認してから文章を読むことで理解が深まりやすいことが明らかとなり、「図表を見てから文章を読む」や「図表を参照しながら読む」といった指示を与えると、内容の理解が促進されることも確認されている。その一方、岸・中村（2009）によれば、混成型テキストを読む過程で、文章を読むことに集中し、図表を活用しない学習者の存在が多数確認され、深谷ら（2000）の研究では、非連続型テキストに対する読み方には個人差があり、全ての学習者が図表と文章を結び付けながら読むわけではないことが示唆されている。これらのことを児童の実態に重ねて考えると、「図表先行型」や「本文先行型」といった図表の読み方をしている児童もいれば、図表を活用しないで文章を読んでいる児童もいることが推察される。このことから、児童の実態に合わせ、図表をどのように活用して読んでいるのかを交流する場を設定することによって、図表に対する個々の意識が言語化され、図表に対する意味や価値を見出していく児童の姿が期待できると考えた。また、「見出した意味や価値を追究する学習活動」を構想する上では、見出した意味や価値を基に自分がどのように図表を読んでいるのかを表現したり、実際に活用したりする場を設定したいと考えた。

管見の限り、学習者の図表に対する意識の調査やその変容から混成型テキストの指導の在り方を考察している研究は多く見られない。そこで、本研究では、児童が図表に対してどのような意識をもっているのか、どのように読んでいるのかを把握することから始め、児童が図表に対する意味や価値を見出したり、追究したりする学習活動を通して、図表に対する意識がどのように変容していくかを明らかにしながら混成型テキストの指導の在り方の可能性を探っていく。

\*上越市立有田小学校

## 2 研究の目的

本研究の目的は、児童の図表に対する意識調査や児童が図表に対する意味や価値を見出したり、追究したりする学習活動を通して、図表に対する意識がどのように変容していくかを明らかにしながら混成型テキストの指導の在り方の可能性を探っていくことである。

## 3 研究の対象と実践の内容

### (1) 実践期間と対象

- ① 研究の対象 J市立A小学校 第5学年1学級 33名
- ② 実践期間 令和7年8月～令和7年9月

### (2) 実践の内容

#### ① 教材について

使用する教材は、光村図書出版『国語五銀河』に掲載されている『固有種が教えてくれること』である。図表やグラフ、写真などの資料（以下：図表）を用いて展開されている文章である。多様な図表を基に論が展開されており、児童にとって、図表の意味や価値について、文章と図表とを結び付けながら追究していくことが十分に可能な教材である。

#### ② 図表に対する意識調査

先行研究における質問項目を基に、質問項目①「図表がある文章を読むとき、あなたは『A：図表を先に見てから文章を読む』、『B：文章を読みながら図表を見る』、『C：文章だけ読む』のどれですか」と質問項目②「文章中に図表があるとよいと感じたことはありますか。それはどんなことですか」を設け、実践の前後に児童にアンケートを実施した。質問項目①は、図表に対する読み方の調査であり、質問項目②は、図表に対する意味や価値についての調査である。

#### ③ 児童が図表に対する意味や価値を見出す学習活動（第一次）

図表に対する意識調査を基に、「図表を活用する読み方」と「図表を活用しない読み方」の2種類の読み方があることを提示し、それぞれのよさや難しさについて交流を図りながら、図表があることの意味や価値について追究する目的を共有する。また、今の自分にとっての図表があることの意味や価値を言語化する場を設けたり、『固有種が教えてくれること』（以下「実際のテキスト」）とテキスト中の図表を削除した文字だけの『固有種が教えてくれること』（以下「図表を削除したテキスト」）と読み比べたりしながら意味や価値を再考する場を設けたりする。

#### ④ 児童が見出した図表に対する意味や価値を追究する学習活動（第二・三次）

児童が見出した図表に対する意味や価値を追究する学習活動については、宇野・松本（2015）の先行研究を参考にした。宇野・松本によれば、「第3学年の児童を対象とした実践の結果から、混成型テキストの読みの学習に、非連続型テキストの生産の過程を位置付けること」で、児童の図表に対する意識が醸成される可能性を示唆している。本研究では、教材の特徴を生かし、児童が様々な種類の図表を生成したり、比べたりすることを通して、一次で見出した図表に対する意味や価値を追究していくことが期待できると考え、「図表を削除したテキスト」を基に、自分で考えた図表の生成を学習デザインに位置付けた。また、第三次では、これまでに追究してきた意味や価値を他の混成型テキストとの読み比べで活用したり、レポートに表現したりする学習活動を設定し、更なる追究を図っていく。

#### ⑤ 単元について

本単元を以下、表1の通りに構想・展開した。

表1 単元計画表

次	時	・学習活動の内容	図表に対する意味や価値を省察する問い
一	1	・混成型テキストを読んだ経験を振り返ったり、『固有種が教えてくれること』を読んだりしながら混成型テキストにおける図表の意味や価値を考える。	・自分にとって図表があるとよいことはあるか。 ・図表があるとよいことは何か。
	2	・「図表を削除したテキスト」を読んだり、「実際のテキスト」と比べてたりしながら、図表の意味や価値について考える。	・『固有種が教えてくれること』の図表があることのよさは何か。
二	3	・「図表を削除したテキスト」を読み、対応する図表1を自分で考えて生成したり、「実際のテキスト」の図表と比べたりする。	・自分の図表1と筆者が載せた図表1の違いは何か。 ・筆者がこのような図表1を載せた意図は何か。
	4	・「図表を削除したテキスト」を読み、対応する図表2を自分で考えて生成したり、「実際のテキスト」の図表と比べたりする。	・自分の図表2と筆者が載せた図表2の違いは何か。 ・筆者がこのような図表2を載せた意図は何か。
	5	・「図表を削除したテキスト」を読み、対応する図表3を自分で考えて生成したり、「実際のテキスト」の図表と比べたりする。	・自分の図表3と筆者が載せた図表3の違いは何か。 ・筆者がこのような図表3を載せた意図は何か。
	6	・自分が図表を生成する上で大切にしていることや筆者が大切にしていること（意図）を比べながら、図表の意味や価値について考えたことをまとめる。	・2時間目に感じた『固有種が教えてくれること』の図表の意味と比べて、どんな違いがあるか。 ・図表を見ないで文章を読む人に図表のよさをどう伝えるか。

三	7	・本単元で学んだことを基に既習の混成型テキストを読み、図表の意味や価値について考えたことをレポート執筆する。	・今回の学習は、5年生までに学習した説明文にどう生かせるか。 ・図表を意識して読み返し、どんなよさが感じられるか。
	8	・執筆したレポートを読み合い、感じたことを伝え合う。	・自分にとって図表があるとよいことはどんなことか。

#### 4 分析方法

混成型テキストにおける指導の在り方の可能性を探るため、次の二つから分析、考察を図る。

一つは、土居（2014）の「図表を伴った説明文（混成型テキスト）の読みのレベル」を参考に作成した「混成型テキストの意識レベル」（表2）を基に、学習過程における学級全体と研究抽出児1名の発話記録と図表に対する意味や価値を省察する振り返り記述の変容を分析する。研究抽出児は、実践前に「図表がなくても読める」という趣旨の発言をしているものの、実際には文章の内容を理解できていない意識レベルが「1」のA児とする。二つは、事前事後のアンケートにおける図表の読み方の変化、図表に対する意味や価値についての自由記述の変容を分析し、考察を加える。

表2 「混成型テキストの意識レベル」

意識レベル	意識レベルの評価基準
「1」	文章を読む上で図表を見ることに意味や価値を感じていない。（言語化できないことも含む）
「2」	図表を見ることに意味や価値を感じているが、実際には詳しく図表を読んだり、文章と照らし合わせたりはしていない。
「3」	文章と該当する図表とを照らし合わせて詳しく読みながら、図表を見ることに意味や価値を感じている。
「4」	図表の情報と文章の情報とを照らし合わせながら読み、適合性があるかどうか考えながら、文章を読む上で図表を見ることに意味や価値を感じている。

#### 5 分析・考察

##### (1) 事前アンケートの結果

表3は、学習を始める前に行った「図表の読み方」についての事前アンケートの結果である。

表3 「図表の読み方」についての事前アンケートの結果

アンケートの質問項目	回答結果	記述の内容（抜粋）
①図表がある文章を読むとき、あなたは「A：図表を先に見てから文章を読む」、「B：文章を読みながら図表を見る」、「C：文章だけ読む」のどれですか。	A：0人 B：31人 C：2人（A児）	
②文章中に図表があるとよいと感じたことはありますか。それはどんなことですか。	ある：17人 ない：16人（A児）	・図表があると文章が読みやすくなる。 ・図表は筆者の主張に説得力を増すと感じたことがある。

事前アンケートからは、学級全体における図表の読み方として、「図表先行型」が0人、「本文先行型」が31人、「図表を見ずに文章だけを読む」が2人であることが分かった。このことから、学級全体の傾向としては、文章を読む上で図表を見るという意識が高い児童が多いことが読み取れる。一方で、なぜ図表を見るのかということについて、そのよさを感じていない児童がいることや、「本文先行型」のうち、図表を見るよさを言語化できたのは17人であったこと、言語化できていても、その内容が「図表があると文章が読みやすくなる」という漠然とした意味や価値の理解にとどまっていることから、図表に対する意識はあるものの、その意味や価値について見出せていない実態が明らかとなった。

##### (2) 第一次の実際と分析・考察

第1時間目、混成型テキストを読んだ経験を振り返ったり、『固有種が教えてくれること』を読んだりしながら混成型テキストにおける図表の意味や価値を考えた。混成型テキストを読んだ経験を振り返った際、A児は、「図表なんてあったっけ」、「図表を見た覚えがない」と図表に対する記憶がないと受け取れる発言を繰り返した。学級全体からも図表に対する記憶がないと受け取れる発言が多くあった。そこで筆者が、児童らが第4学年の時に学習した混成型テキストの写真を提示すると、歓声が上がり、「写真があると文章が読みやすくなる」という発言があった。その一方、A児は、「写真なんてほとんど見ない。自分は文章だけ読んで考えている」という発言をした。この学習において、「説明文における図表があることの意味を考えていく」という学習の目的を全体で共有した後、『固有種が教えてくれること』を一読し、初発の感想と一読した際に感じた図表があることの意味について自由記述した。

第2時間目は、『固有種が教えてくれること』を読んで理解していることを確認したり、「図表を削除したテキスト」を読み、「実際のテキスト」と読み比べたりしながら、図表の意味や価値について考え直した。児童らは、「図表を削除したテキスト」を読むと、「図表がないと読みにくい」、「ここにはニホンカモシカの写真があった方が絶対分かりやすくなる」等、図表があることの意味や価値について発言した。A児も、「最初は図表はなくても読めるし、そこまで重要な気がしなかったけど、あった方が絶対読みやすくなって思った」と発言した。その後、児童らは、「実際のテキスト」を再読し、「図表を削除したテキスト」と比べて、図表があるとどんなよさがあるかを自由記述した。

表4 第一次における混成型テキストの意識レベルの結果

意識レベル	A児と学級全体の他児童の記述(抜粋)	人数(事前)	人数(1時間目)	人数(2時間目)
「1」	・今まで読んだ説明文で図表はあったと思うけど、あんまり覚えていないし、あってよかったと思ったことは特にはないです。(1時間目A児記述) ・先生から言われれば見ているけど、言われなければ図表は見えていません。(1時間目他児童記述)	16人(A児)	3人(A児)	0人
「2」	・図表はあった方が読みやすくなります。(1時間目他児童記述) ・図表があった方が絶対読みやすいなと感じました。(2時間目A児記述)	17人	27人	22人(A児)
「3」	・ニホンカモシカとかオオカミとかの説明の文章のところは、図表があると「そうだなあ」って思うし、この写真がないと読み手は分かりにくいことがあるから、写真があると文章に説得力が増す気がすると思います。(2時間目他児童記述) ・特に天然林のデータは、筆者の主張が読者により伝わりやすくなるだろうし、「固有種の保護は、その生育環境の保護とバランスが…」のところの説得力が増す。(2時間目他児童記述)		3人	10人
「4」	・図やグラフがあって、それぞれの事例がよく分かるようになってきている。けど、「固有種がすみ環境を残していかなければならない」と主張しているなら、環境を残していくよさについて、もっと伝わるように図を工夫したり、増やしたりした方がいいのではないかな。(2時間目他児童記述)		0人	1人

事前アンケートでレベル「1」と判断した16人の児童が、1時間目の授業後には3人という結果となった。つまり、多くの児童にとって、混成型テキストを一読したことで、図表があるよさを感じ、それを言語化できるようになった。その一方、一読するだけでは図表があることのよさを感じられない児童も少数いることが分かった。A児も一読しただけでは、図表があることのよさを感じられなかった児童の一人であった。

しかし、第2時間目では、「図表を削除したテキスト」と「実際のテキスト」とを読み比べる過程で、1時間目の段階では図表があることのよさを感じられなかった3名の児童も含めて、全ての児童が図表があることのよさを言語化できた。「実際のテキスト」を読むことだけでは図表のよさを感じられない児童にとっては、「図表を削除したテキスト」との比較が効果的であると言える。また、児童の記述を意識レベルで分析すると、「図表があった方が読みやすくなります」といった「2」の段階にとどまる記述が多いことが分かり、このことから、「図表を削除したテキスト」と「実際のテキスト」を比較して読むことによって、図表があることで自分自身にとっての読みが深まったという認識がつけられるものの、それが自分のどんな読みの深まりにつながっていったかという点については認識できていないことが読み取れる。これらのことから、意識レベルが「1」の児童にとっては、「図表を削除したテキストとの読み比べ」が「1」→「2」へ高める学習活動として有効であり、意識レベルを「2」→「3」へ高めるためには、図表があることのよさを自分なりに意味付け、価値付けていく学習活動が有効になっていくことが推察できる。

### (3) 第二次の実際と分析・考察

表5は、第二次における学級全体とA児の意識レベルを自由記述から分析した結果である。

表5 第二次における混成型テキストの意識レベルの結果

意識レベル	A児と学級全体の他児童の記述(抜粋)	人数(3時間目)	人数(4時間目)	人数(5時間目)
「1」		0人	0人	0人
「2」	・やっぱり、図表があるとなんかいい気がする。(3時間目他児童記述) ・図表があると話がおもしろく感じられる。図表をつくってみて、図表には文章を詳しくしようとする気持ちがたくさん込められている気がした。(3時間目A児記述)	2人(A児)	0人	0人
「3」	・図表1は、日本とイギリスを比べたデータが三つも載っていて、日本に固有種が多くいることが分かる図表。図表と一緒に読むと、頭の中が整理されて続きが読みやすい。(3時間目他児童記述) ・資料2をじっくり読むと、図表から分かることがたくさんあることを感じた。図表は今まで読み飛ばしていたけど、図表に注目してから文章を読んでみたくなった。それだと2倍文章を楽しめると思う。(4時間目A児記述)	20人	12人(A児)	7人
「4」	・イギリスと日本が「大陸に近いところにある島国」ってということが地図があることによって分かる。それが分かる、環境が似ているということが読者に分かるし、だから陸生ほ乳類や固有種の数を対比して、違いを明らかにしようとしている事例が伝わる。(3時間目他児童記述) ・地図だけでなく、アマミノクロウサギとかの動物の絵が描いてあると、その時代にその動物がその土地にいたことが一目で分かる。4、5、6段落の事例の大切なことを図にまとめていて、それが自分の読みやすさにつながっていたのだと分かった。(5時間目A児記述)	11人	21人	24人(A児)

第二次では、「図表を削除したテキスト」を読み、対応する図表を自分で考えて生成したり、自分が生成した図表と『固有種が教えてくれること』に実際に掲載されている図表とを比べ、その相違点から筆者が図表に込めた意図を考えたりする活動を行った。児童の記述と意識レベルから分析した結果、第3時、第4時、第5時と活動を重ねるごとに、意識レベル「2」、「3」と判断できる児童の数が減っていき、意識レベル「4」と判断できる児童の数が増加(11人→21人→24人)したことが分かった。A児も、第3時間目では、「2」であった意識レベルが、「3」、「4」と高まった記述をした。A児は、第3時、「地

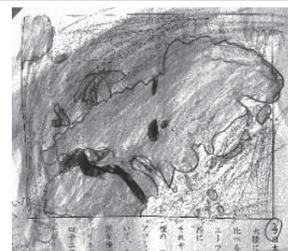


図1 A児が生成した図表

図があると文章が読みやすくなる」と考え、「図表を削除したテキスト」から、地名や国の位置関係の情報を取り出して図表（図1）を生成した。その後、実際の図表と比べると、「筆者も地図を載せていた。けど、日本の固有種の多さとそれを残していくことをもっと強く主張するために、面積や種類も表で載せていて、すごく分かりやすくなっていった」と感想に書いた。その後、第4、5時間目では、図表を生成する過程で、筆者の「日本固有種の多さ」と「固有種を残していくこと」がより伝わるように「図表を削除したテキスト」から筆者の主張に関わる適切な情報を取り出し、自分で考えた図表を生成していた。

これらのことから、「図表を削除したテキスト」を基に、自分で考えて図表を生成したり、生成した図表と実際の図表とを比べながら、その相違点から筆者が図表に込めた意図を考えたりする学習活動は、児童が、図表があることよさを文章と図表とを結び付けながら自分の言葉で意味付け、解釈し、価値付けていく行為を促すとともに、図表に対する意味や価値についての考えの質を高めていくと言える。

#### (4) 第三次の実際と分析・考察

表6は、第三次における学級全体とA児の意識レベルを自由記述から分析した結果である。

表6 第三次における混成型テキストの意識レベルの結果

意識レベル	A児の記述（抜粋）	人数 (7時間目)	人数 (8時間目)
「1」		0人	0人
「2」		0人	0人
「3」	・今日は3年生の時に読んだ『ありの行列』を読みました。(中略)『ありの行列』にもたくさんの図表がのっていました。今までは図表を気にして読んだことがなかったけど、今回図表を意識して読んでみたら、ウィルソンがはたらきありの動きに注目したことによって研究を進めたことがよく分かったし、図表から文章の意味をつなげて読むと話がよく理解できることを感じました。(7時間目A児記述)	10人 (A児)	5人
「4」	・6月に読んだ『言葉の意味が分かること』を読み返してみました。自分は、図表をほとんど読まないタイプで、改めて読み返すと、やっぱり文章だけで読んでいたことが分かりました。(中略)自分が筆者だったら、「言葉を面であらえる」ということが言葉だけではイメージしづらい読者がいることを考えて、読者がよく分からないような部分を想像しながら図を取り入れると思います。筆者の意図を考えながら図表を読むことと自分が筆者だったらどんな図表を取り入れるかを考えながら読むと、文章を深く理解できるし、判断力もつくし、とてもいい読み取りができると思うのでこれからも図表を意識していろいろな文章を読みたいです。(8時間目A児記述)	23人	28人 (A児)

第三次では、本単元で学習したことを基に既習の混成型テキストを読んだり、図表の意味や価値について考えたりしたことをレポートに書く活動を行った。児童の記述と意識レベルの分析からは、全ての児童が「3」か「4」と判断できる記述をしており、第一次、第二次で見出した意味や価値を基に他の混成型テキストを読み進め、図表に対する意識を高めていったことが分かる。意識レベル「3」の児童の記述をまとめると、本単元の学習で見出した図表に対する意味や価値を他の混成型テキストを読む過程で活用し、その意味や価値を再認識することで、より一層文章の理解を深めることができた主旨が確認できた。また、意識レベル「4」の児童の記述をまとめると、『固有種が教えてくれること』で見出した図表に対する意味や価値を他の混成型テキストを読むことで再確認するとともに、自分が筆者だったかどうかのような図表を取り入れるか、筆者が取り入れた図表によって読み手にどんな働き掛けが行われているかといった図表の効果に着目しながら文章の理解を深めることができた主旨が確認できた。これらのことをまとめると、混成型テキストにおける指導の在り方として、「児童が図表に対する意味や価値を追究する学習活動」においては、他の混成型テキストとの読み比べや比べて感じたことをまとめさせることが、見出した図表に対する意味や価値を基に、図表があることよさを文章と図表とを結び付けながら詳しく読んだり、筆者の意図を推察しながら読み進めたりする児童の姿を促すのだと言える。

#### (5) 事後アンケートの結果

表7は、実践後に行った「図表の読み方」についての事後アンケートの結果である。

表7 「図表の読み方」についての事後アンケートの結果

アンケートの質問項目	回答結果	記述の内容（抜粋）
①これから図表がある文章を読むとき、あなたは「A：図表を先に見てから文章を読む」、「B：文章を読みながら図表を見る」、「C：文章だけ読む」のどの読み方をしていきたいですか。	A：11人（A児） B：22人 C：0人	
②文章中に図表があるとよいと感じたことはありますか。それはどんなことですか。	ある：33人（A児） ない：0人	・始めは図表なんてなくても同じだと思っていたけど、図表があることで筆者の主張がよく読み取れるようになった。文章と図表を一緒に読むのもありだし、図表から読むとどんなことが書いてあるんだろうって思えて、わくわくする。この勉強で図表のおもしろさを感じられたし、これからも文章以外のことに注目して読んでみたいと思いました。(事後アンケートA児記述)

事後アンケートからは、学級全体における図表の読み方として、「図表先行型」が11人、「本文先行型」が22人、「図

表を見ずに文章だけを読む」が0人となった。事前アンケートと比較し、「図表先行型」が0人→11人と増加したこと、文章だけ読むという児童が2人→0人となったことから、図表に対する意味や価値を見出したり、追究したりする一連の学習過程が、児童の図表に対する読み方に向上的な変容をもたらすものであったと言える。また、質問項目②の結果からは、単元を通して全ての児童が図表の意味や価値を言語化できるようになったことが読み取れる。そして、事前アンケートにおける質問項目②では、意識レベルが「2」にとどまる記述が多かったものの、事後アンケートの記述からは、全ての児童が意識レベル「3」、「4」の記述をしていることから、本単元を通して学級全体の意識レベルそのものが高まったと言える。さらに、自由記述からは、本単元での学習を今後の生活や学習で生かしたいという主旨も多く確認できたことから、一連の学習過程が学習後の児童の姿にも向上的な変容をもたらす期待ができることが分かった。

## 6 成果と課題

本研究の成果は、次の三つである。

一つは、「児童が図表に対する意味や価値を見出す学習活動」の有用性を明らかにしたことである。本研究では、図表の読み方に関わる先行研究を参考に、学習者の図表に対する意識調査を行い、意識レベルを基に分析を行った。その結果、図表を活用しない読み方をしている児童がいること、図表を活用して読んでいる児童でも図表の意味や価値について言語化できない児童がいることが分かった。このような児童にとっては、第一次の通り、「図表を削除したテキスト」と「実際のテキスト」との読み比べによって、図表があることの意味や価値を言語化できるようになるという結果が明らかとなった。このことから、混成型テキストの指導の在り方として、学習者の実態に応じて、図表そのものに対する意味や価値を学習者自身が見出していく学習活動を視野に入れて構想・展開していくことが重要であると言える。

二つは、「図表に対する意味や価値を追究する学習活動」の有用性を明らかにしたことである。本研究では、「図表があるとよいこと」を追究することを目的に学習活動を展開してきた。第二次、第三次の通り、児童らは、「図表を削除したテキスト」を基に図表を自分で考えて生成し、それらを筆者の意図と比べたり、見出した意味や価値を基に他の混成型テキストの読解に活用したりしながら図表に対する意味や価値を追究してきた。追究する過程で、図表に対する意識レベルが高まる様相が確認されたことから、図表に対する意味や価値を追究する学習活動の有用性が明らかとなった。このことから、混成型テキストの指導の在り方として、学習者自身が見出した意味や価値を追究する場を設定することを視野に入れて学習活動を構想・展開していくことが重要であると言える。

三つは、上記の二つの学習活動を一連の学習過程として単元に位置付けることの有用性を明らかにしたことである。A児のように、図表を活用しない読み方をしている意識レベル「1」の児童が、単元を通して「1」→「2」、「2」→「3」、「3」→「4」と意識レベルを高めてきたように、二つの学習活動を一連として行うことによって、学習者の図表に対する意識や読み方が変容していく様相が確認できた。このことから、混成型テキストの指導の在り方として、上記の二つの学習活動を一連とした学習過程を単元に位置付けていくことの有用性が明らかとなり、混成型テキストの指導の在り方の一つとして、その可能性を示すことができたと考えている。今後は、本研究での成果が他の混成型テキストの指導に援用できるかを検証したり、本研究で検証することができなかった数値的な学力の面からも考察を加えたりしながら、混成型テキストの指導の在り方の可能性を探っていきたい。

### 【引用文献（参考文献）】

- 岸学・中村光伴・相澤はるか「非連続型テキストを含む説明文の読解を促進するには？－眼球運動測定による検討－」『東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅰ』62号、東京学芸大学学術情報教育委員会、2011年、pp177-188
- 岸学・中村光伴「非連続型テキストを含む文章の読解過程－眼球運動を指標として」『熊本学園大学論集総合科学』第15号、熊本学園大学総合科学研究会、2009年、pp105-119
- 土居正博「図表を伴う説明的文章の指導のあり方に関する一考察：小学校5年生「天気予想する」の実践を通して」『国語教育探究第30集』国語教育探究の会、2017年、pp56-63
- 難波博孝「未来の国語教育の方向性」『国語教育思想研究』12号、広島大学国語教育思想研究会、2016年、pp11-14
- 深谷優子・大河内祐子・秋田喜代美「関連する情報への注意喚起の信号が歴史教科書の読み方に及ぼす影響」『読書科学』第44号、日本読書学会、2000年、pp125-129
- 松本修・宇野直人「混成型テキストの読解力向上のための学習デザイン」『教師養成研究紀要』第6号、玉川大学教職大学院、2015年、pp36-48
- 吉川芳則「説明的文章の領域における実践研究全国大学国語教育学会編」『国語科教育学研究の成果と展望』、学芸図書、2013年、pp201-208